RPI主催フォーラム
地域を元気にする図書館を考える

近年、図書館を地域活性の拠点とする視点が求められています。2022年の図書館総合展で株式会社アール・ピー・アイは、「地域を元気にする図書館」というテーマでフォーラムを実施しました。
※このレポートは2022年11月22日に実施したフォーラム内容をRPIがまとめたものです。

地域活性化と図書館—太田市美術館・図書館の事例から—

2017年4月に開館した太田市美術館・図書館では、初期構想から地域活性を大きな目的として定め、準備段階からさまざまな取組が行われています。

太田市美術館・図書館の管理運営基本計画委託事業者に選定されたスパイラル/株式会社ワコールアートセンターの守屋慎一郎氏に構想から初期コンセプトまでのディレクションについて、図書ディレクターとして施設のディレクションに携わった花井裕一郎氏に図書事業の構築について、それぞれお話しいただきました。

構想から初期コンセプトまでのディレクションについて

守屋 慎一郎 氏
合同会社企画室 代表
スパイラル/株式会社ワコールアートセンター プランナー
イベント学会理事・副事務局長

はじめに

群馬県太田市の太田駅北口にある太田市美術館・図書館は、5つのボックスの周囲にスロープが絡みつき一体の建物となった特徴的な施設です。3階建ての各階に図書スペースと美術スペースがあり、美術スペースには、1階から3階にそれぞれ展示室1、展示室2、展示室3が、図書スペースには、エントランス近くのブラウジングコーナーから、建築、人文科学、自然科学等の書棚がスロープに沿って設置されており、3階のレファレンスルームへと続いています。2階は図書スペースのメインフロアとして、絵本・児童書コーナーとアートブックコーナーがあります。また、1階では地元事業者によるカフェが運営されています。

太田市美術館・図書館の外観（photo by Hasec, CC0）

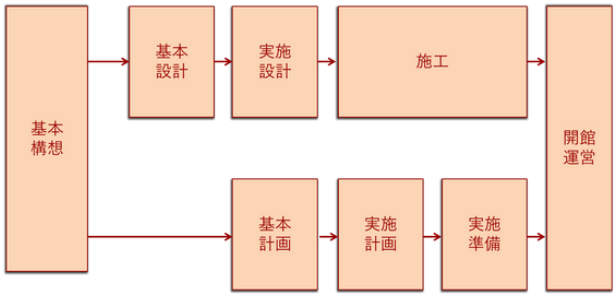
計画の背景

太田市は、戦前・戦中は飛行機製作所、戦後は自動車メーカーの製造拠点として、重工業を中心に発達してきました。近年は郊外に大型商業施設が開業したことで中心市街地の衰退が指摘されるようになり、太田駅前エリアの活性化が太田市美術館・図書館設置の大きな動機になっています。

設置の過程

文化施設の設置は一般的に、行政による基本構想をベースに、ハード面の基本設計・実施設計を行います。ハード面の実施設計と並行して、ソフト面である管理運営の基本計画をまとめます。ハード面の施工と同時期に、管理運営の実施計画、実施準備に取組み、開館準備に至るのが一般的です（図1）。

図1　文化施設等整備の一般的な流れ



上段がハード面、下段が管理運営（ソフト面）のプロセス

太田市美術館・図書館もこのプロセスで整備され、2013年5月に市の政策会議で文化交流施設の整備が示されたのち、2014年1月に（仮称）太田駅北口駅前文化交流施設整備基本方針が策定され、同年10月に基本設計が完了しました。同時期に、管理運営計画策定事業者選定プロポーザルが実施され、スパイラル/株式会社ワコールアートセンターのチームが選定されました。その後、2015年3月に実施設計が完了し、管理運営基本計画が策定されました。これ以降、建築の着工と並行し、市民ワークショップ等を経て、2016年3月に管理運営実施計画が策定されました。以下、それぞれの構想・計画におけるポイントを紹介していきます。

基本構想（整備基本方針）

太田市が定めた基本構想では、太田市美術館・図書館の役割として、

- 人が集まりやすい駅前に文化施設を設けることで、市民及び来街者が文化に触れやすい環境を目指す
- 文化交流により太田駅周辺の賑わいを図る

とされており、構想当初より、文化交流による中心市街地活性化が目標とされていました。

管理運営基本計画

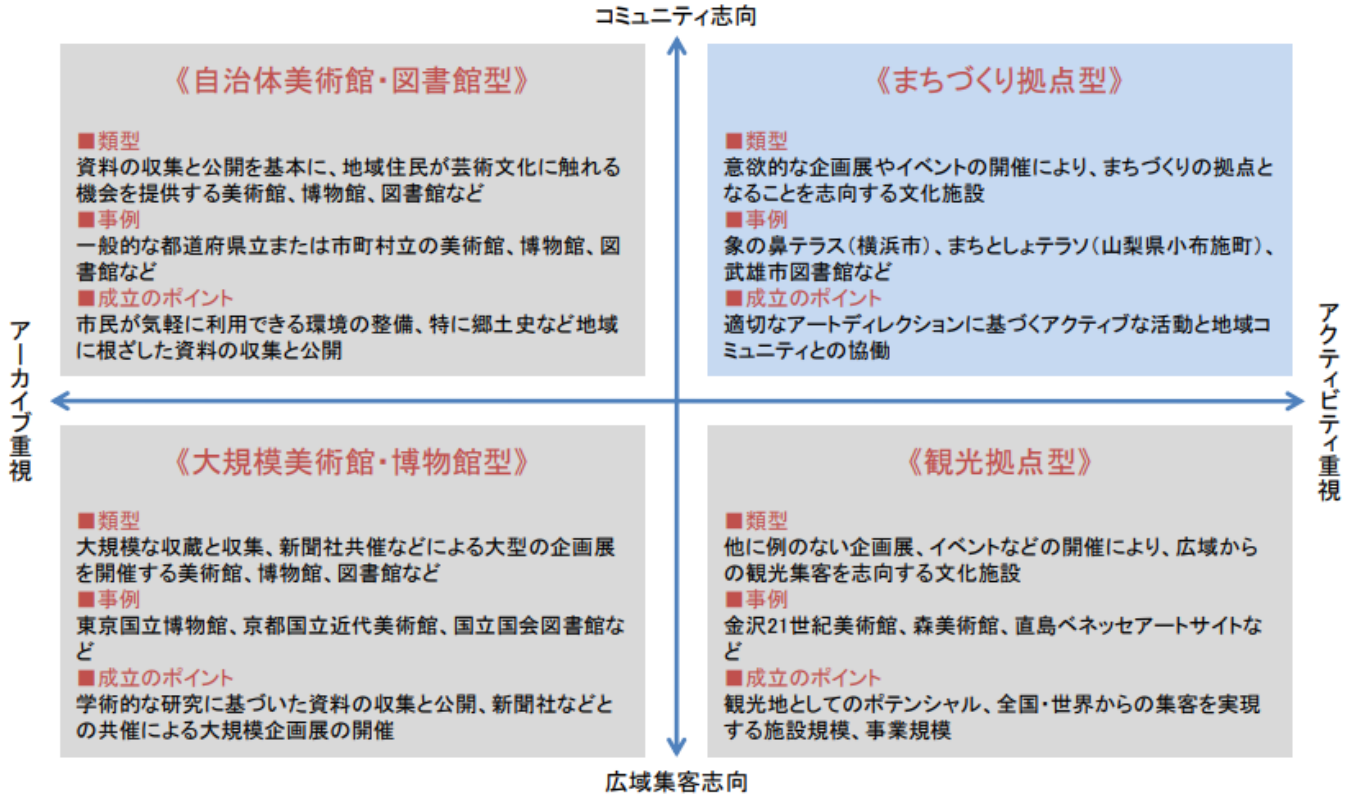
管理運営基本計画では、施設の基本的な考え方を整理しました。既存の文化施設を、コミュニティ志向—広域集客志向、アーカイブ重視—アクティビティ重視の4象限で分類し、太田市美術館・図書館が目指すべき方向性を検討しました（図2）。基礎自治体が設置する美術館や図書館では、アーカイブ重視かつコミュニティ志向（図中の左上象限）が一般的ですが、最近は観光拠点型と言えるアクティビティ重視、広域集客志向（図中の右下象限）の施設も誕生しています。

太田市美術館・図書館では、整備基本方針を踏まえ、地域コミュニティの人々に利用してもらうことを目的にアクティビティ重視の「まちづくり拠点型」（図中の右上象限）を目指すこととしました。

管理運営実施計画

管理運営実施計画では、太田市美術館・図書館の基本理念を「創造的太田人—まちに創造性をもたらす、知と感性のプラットフォーム—」と定めました。重工業を中心に発展した太田市で、「ものづくり」を通してはぐくまれた市民の創造性を、これからのまちづくりに生かす拠点と位置づけています。

図2　施設の基本的な考え方の整理



基本理念をもとに定められた基本方針では、美術館と図書館を一体的に運営するため、美術事業・図書事業に共通する事業の方針をつくり、それに則って各事業を検討しました。

運営面では太田市直営の施設として運営することを決定しました。図書館の運営では指定管理方式を取る場合も多くありますが、太田市美術館・図書館の場合は、単に図書の貸出や美術の展示にとどまらず、地域と一体になってまちづくりを行う拠点とするため行政の積極的関与が必要と考えたからです。

総合ディレクション業務

必ずしも図書館や美術館の専門家ではない行政職員が開館準備作業を円滑に進めるため、総合ディレクション業務も実施しました。この業務では、月に1度の館長、学芸課長、管理課長による意思決定会議に、総合ディレクションとして、図書ディレクター（花井氏）、美術ディレクター、チーフプランナー（守屋氏）が加わり、開館準備をサポートする形を取りました。

また、開館準備室に、美術、図書、まち展開、広報、施設管理、総務の6部門を設置し、各週でチーフプランナーが参加する部門会議を開催しました。その際、総合ディレクションを行うディレクターやチーフプランナーではなく、市職員が主体となって内容を検討し、自ら企画書を書くよう心がけました。

部門会議の内容は、職員全員と図書ディレクター、美術ディレクター、チーフプランナーが加わる月に1度の連絡調整会議で諮り、そこで得たフィードバックをもとに再度部門会議で調整し、最終的に意思決定会議にかけ、方針を決定していきました。

参加型アートプロジェクト「ひかりの実」の様子（発表資料より）

「創造的太田人」の実践

太田市美術館・図書館の基本理念「創造的太田人」を実践するためには、職員自らが創造的になることが必要と考え、開館前からイベントやワークショップ、アートプロジェクトを多数実施しました。

その一つ、アーティストの髙橋匡太氏による参加型アートプロジェクト「ひかりの実」では、果実袋に笑顔を描き、袋の中にLEDを入れて樹々に実らせるイベントを市内の全27小学校の参加を得て実施しました。

開館記念パフォーマンス「オオタドン」では、フラダンス、キッズダンス、八木節など市内の7団体が参加するパフォーマンスを実施し、太田市美術館・図書館を通して市民が創造的活動に関わっていくことを、パフォーミングアーツを通じて示すことができました。

開館記念パフォーマンス「オオタドン」の様子（発表資料より）

また、臨時職員として雇用したスタッフにも施設運営に積極的に関わってもらうため、館内での企画をスタッフ全員に提案してもらいました。スタッフ発の企画内容を否定せず、活かしながらブラッシュアップしていき、その成果として、ハロウィンイベントなどを開催することができました。

さいごに

太田市美術館・図書館ができる前、太田駅周辺は人通りが少なく、子どもたちの笑顔もあまり見られませんでした。こうした地域の現状を見て、新たに設置する美術館・図書館が太田の子どもたちの笑顔の容れ物になることを目指し、この事業に携わってきました。実際、施設ができてからは、周囲に新しくカフェができたり、もとからあった飲食店にも活気が戻ったように感じます。

太田市美術館・図書館に関する構想・計画等の資料は、太田市美術館・図書館のウェブサイトで公開されています。ぜひご覧ください。https://www.artmuseumlibraryota.jp/

図書事業の構築について

花井 裕一郎 氏
演出家
一般社団法人 日本カルチャーデザイン研究所　理事長

はじめに

太田市美術館・図書館だけでなく、図書館をつくる際に意識しているのは「思考を整理する」ということです。太田市美術館・図書館が目指すような、まちづくりにコミットする図書館をつくるには、既存の図書館を参考にするだけでは不十分です。図書館の資料には、まちづくりに関わる「観光」や「賑わい」など多様なテーマや要素があり、そうした資料をパフォーマンスよく利用するには、運営側が広い視野を持っていなければなりません。まずは、既存の図書館のルールを取り払い、新しい思考で取組むことが必要です。

図書館は民主主義的に平等であるはずなのに、みんなが使っているわけではないという現状があります。より多くの人に使ってもらうには、図書館のファンを地域に増やし、図書館の良さをほかの人に伝えてもらえばよいと考えました。また、図書館のファンになってもらうには、太田市美術館・図書館のイベントでもそうですが、地域の人に関わってもらう必要があります。そうして、お客様の気持ちと行動が循環することで図書館に通う人が増えていき、結果的にまちの教養や、市民の文化価値への想いも育まれるのではないでしょうか。

いま世界では戦争をはじめとする大変なことが起きています。教養を高め、世界を知る道筋が図書館にあると思っています。

絵本コーナーの選書

太田市美術館・図書館の絵本コーナーの選書にあたっては、雑誌の専門家や美術大学の先生等からなる選書チームを作って取組みました。チームメンバーに、子どもの本を通して国際理解を深め、 世界平和を訴える活動をしている団体で、国際児童図書評議会（IBBY）の日本支部である日本国際児童図書評議会（以下、JBBY）の関係者がいたことから、外国の絵本を含む、国際アンデルセン大賞（IBBYが主催する国際児童文学賞）に輝いた本が多数所蔵されています。

外国の絵本は、日本の絵本と色使いが違う点が見どころであったり、言葉がわからなくても絵を見て感じるものがあるのではないでしょうか。

絵本の分類を考えるワークショップ

その他、国際アンデルセン大賞を受賞した本以外にも、新しく絵本を購入しました。その際、絵本を分類するワークショップを実施し、親子に参加してもらいました。図書館職員が行う分類とは違い、子どもたちの絵本の分類には、彼らがどうやって本を見つけているのか、そのヒントがあるのではないかと考えたためです。

結果として、思っていた以上に多くの分類ができ、その中には、「卵やき、おにぎり、お弁当」や「ちゃん」シリーズ（「さっちゃん」など、絵本のタイトルに「ちゃん」がついているもの）など、職員では考え付かないような分類もありました。

「卵やき、おにぎり、お弁当」分類は、子どもたちが、一連の思考のもとで同じテーマの絵本を探しているのではないかという発見がありました。また、「ちゃん」シリーズには、「さま」シリーズや「くん」シリーズ等も加わり、現在も絵本コーナーの分類として使われています。

子どもたちがワークショップで自ら考えた分類を実際の運営に活用することで、子どもたちが「自分の図書館」として太田市美術館・図書館をとらえるきっかけになっていると思います。

「ちゃん」シリーズによる分類（発表資料より）

絵本の並び方を考えるワークショップ

世界地図を眺めるように、本棚に絵本を置いてはどうだろうか、というテーマで親子向けワークショップを実施しました。絵本はどこの国でつくられたのか（作家はどこの国の人か）をみんなでチェックし、各国の地理的な位置を、絵本を配架することで、書棚に落とし込んでいきました。初めて知る国があった、こんな場所にあるんだ、といった発見がありました。現在も絵本コーナーでは国別による並べ方を採用しており、壁に世界地図を貼り、所蔵している絵本がある国を国旗で示しています。

「絵本コーナー」の世界地図（発表資料より）

利用者目線での図書館経営

ワークショップでの子どもによる絵本の分類や配架を図書館運営に導入したことで、図書館職員にとっては、蔵書の管理が大変になりました。しかし、管理者目線ではなく、利用者目線で図書館経営を考えなければ、利用者は「わくわく」や「楽しさ」を感じることができません。図書館を訪れたお客様にどんなふうに「わくわく」や「楽しさ」を感じてもらえるかを考え、裏で働く苦労も喜びとして捉えてほしいと思っています。

おおたまちじゅう図書館

日本国内の約20か所で実施されているまちじゅう図書館の取組を太田市美術館・図書館でも導入しました。まちじゅう図書館とは、地域に住んでいる人が自分の持っている本を玄関先や店先に置くことで、本を通してコミュニケーションをはかる活動です。太田市美術館・図書館は、まちじゅう図書館の事務局として関わっています。

おおた
まちじゅう
図書館
INTOWN
LIBRARY,
OTA

まちじゅう図書館の取組では、地域の参加店にフラッグを出したり、参加店のマップをつくります。これらをもとに、街歩きをしながらお気に入りの図書館を探すことができます。太田市の場合は、美術館・図書館のサイン計画と一体で、まちじゅう図書館のフラッグや地図もデザインしました。

まちじゅう図書館の主催者は「館長さん」と呼ばれ、利用者とのコミュニケーションを楽しんでいます。書籍を貸し出すかどうかは、事務局ではコントロールせず、各図書館にまかされています。貸し出さない図書館もあれば、貸出ノートや簡単なシステムに記録し貸し出す図書館もあります。

太田市では、まちじゅう図書館を実施するにあたって、興味のある方を募り、事例紹介やディスカッションの場を設けました。現在では、太田市美術館・図書館を中心に、37のまちじゅう図書館が参加しています。鉄道の本を置いている和服屋さん、さまざまな薬瓶と一緒に本を並べている薬屋さん、来館者と一緒にお話できるブースを設けている酒屋さんなど多様です。

図書館に司書という本の専門家がいるのと同様に、各まちじゅう図書館にもその本棚の本のことをよく知り、専門性を持った館長がいます。

「創造的太田人」へ

ご紹介した図書事業の取組を通して、地域のさまざまな人が図書館のファンになり、主体的に関わって、まちじゅう図書館の館長さんのように図書館の一員になっています。こうした流れが、基本理念の「創造的太田人」につながると考えています。

『図書館元気指数』を考えるディスカッション

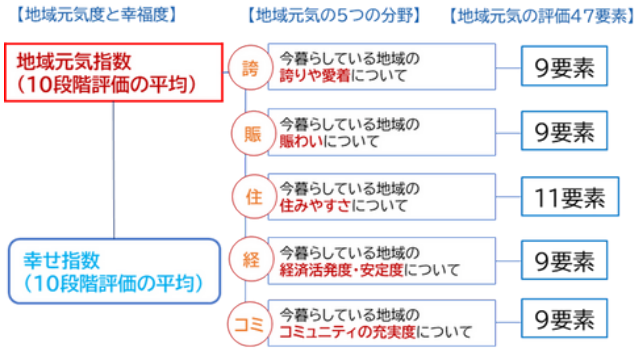
地域を元気にする図書館のあり方やその指標となる『図書館元気指数』を、株式会社アール・ピー・アイの「地域元気指数調査」を活用し、講師の守屋氏、花井氏、そしてオーディエンスの皆様からもご意見を取り入れながらディスカッションしました。

「地域元気指数調査」について

全国には、気候風土に根ざした暮らし、住人が誇りと愛着を感じる情景など、その土地ならではの個性や特徴もつ多様な地域が形成されています。株式会社アール・ピー・アイは、全国に多様で活気にあふれた地域が存在し続けることこそが、日本の魅力と豊かさを支え、これからの社会の元気や幸福をつくると考えています。そこで、地域の元気を増幅できるような施策や取組を明らかにし、地域の元気や個人の幸福度を高めることを目的に、「地域元気指数調査」を2016年より毎年実施しています。

この調査では、回答者に自分の地域の元気はどのくらいか、10点満点で評価してもらいます。この平均を、地域元気指数と呼んでいます。さらに5つの分野を設定し、各分野に紐づいた47の指標について、それぞれ当てはまると感じるかどうか、5段階で評価してもらいます。この47指標を地域の元気度の評価（10点満点）の要因として分析しています。また、回答者自身がどのくらい幸せだと思うか、10点満点で評価してもらいます。この平均を、幸せ指数と呼んでいます（図3）。

図3　地域元気指数調査の構成



このイベントでは、「地域元気指数調査」の評価指標として設定している5つの分野について、図書館の活動の指数となるキーワードのアイデアを講師、参加者から出していただきました（図4~図8）。

図4　『誇りや愛着』に関する検討内容

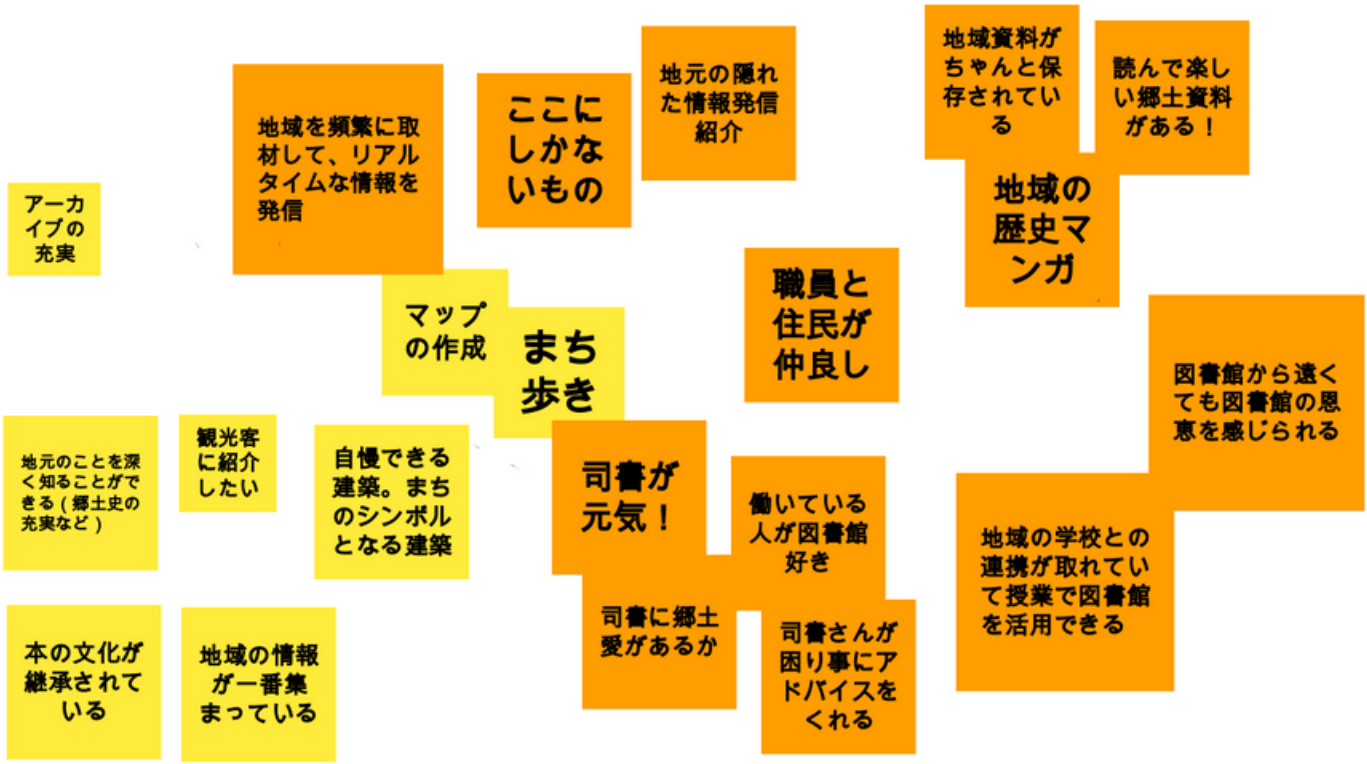


図5　『賑わい』に関する検討内容

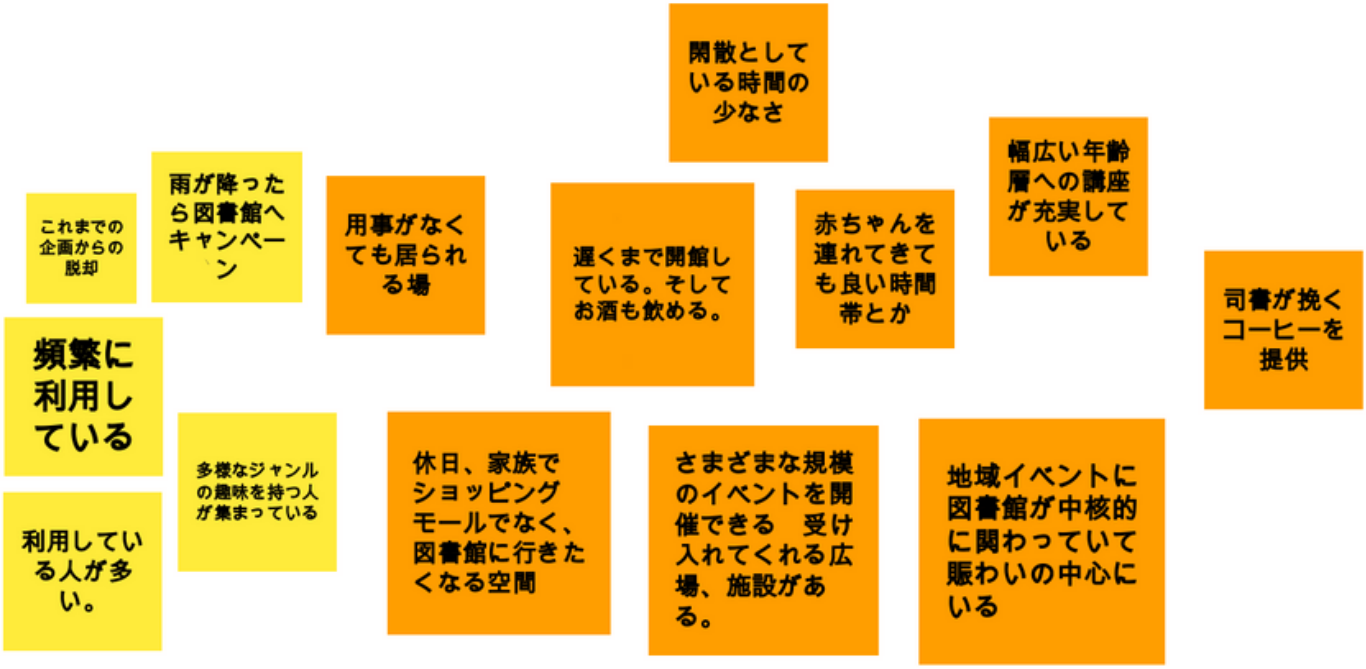


図6　『住みやすさ（＝使いやすさ）』に関する検討内容

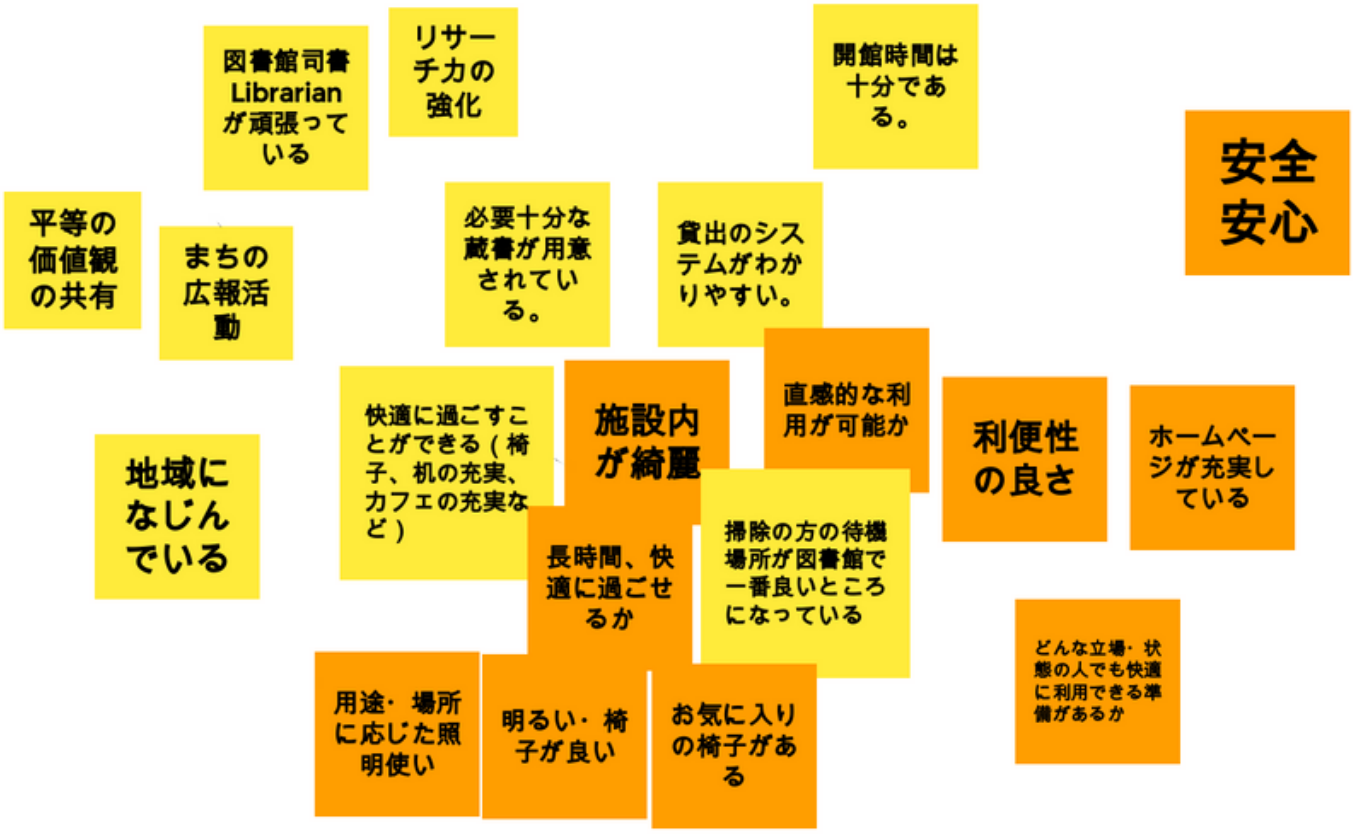


図7　『経済活発度・安定度』に関する検討内容

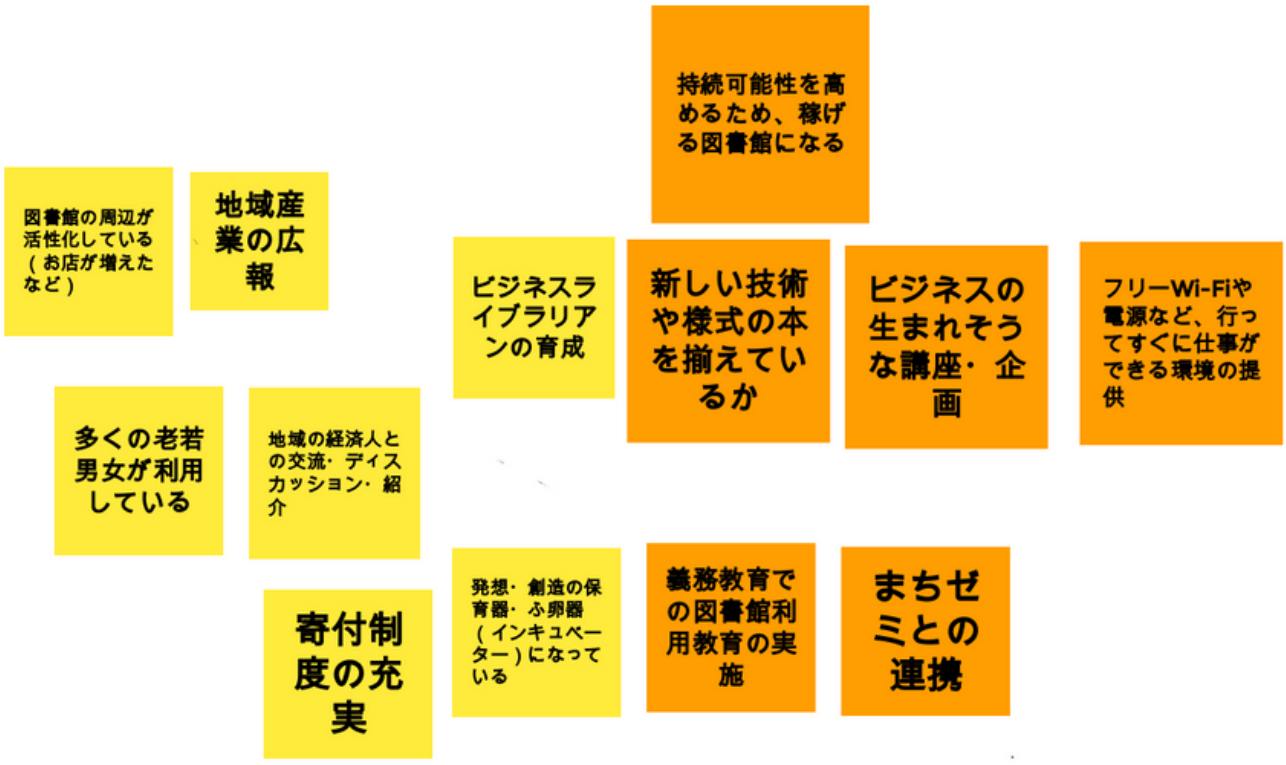
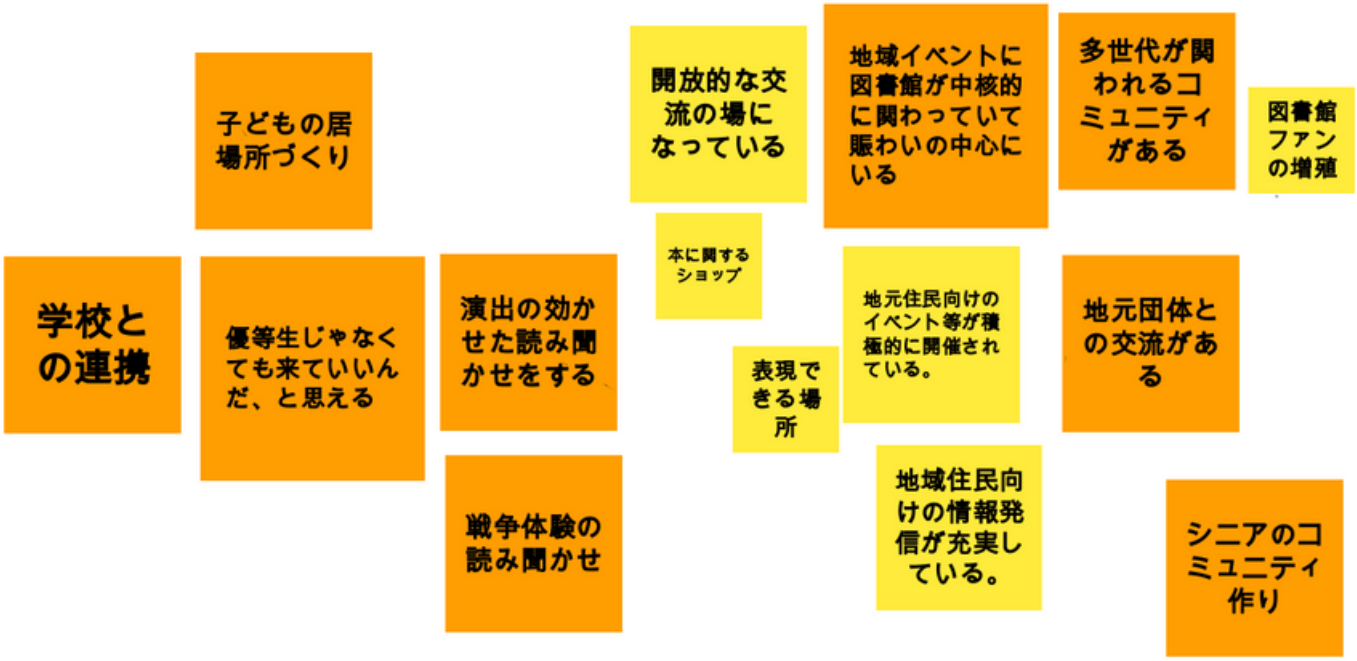


図8　『コミュニティの充実度』に関する検討内容



RPI Regional Planning Institute
お問い合わせ先 | このレポートに関するお問い合わせは下記までお願いいたします。
株式会社アール・ピー・アイ　藤原
TEL　03-5212-3411　FAX　03-5212-3414　E-MAIL　fujiwara@rpi.co.jp